

# 『豊川本平家物語』の音韻

—— 音便を中心に ——

平家物語が琵琶法師による平曲のかたちで世に行われてきたことは周知のことである。平曲は、鎌倉期からあったようであるが、室町初期に大成され、以後およそ百年間隆盛をきわめたといわれる。応仁の乱でいったん衰えたが、江戸時代にはいると幕府の盲人保護政策にのって勢力をもち返し、明治に至るまでの間、ひとり盲人のみならず晴眼者の間でも、武士、学者、俳人らがこれを愛好したことが知られている。

平曲はこのように口承芸能の一つとしての歴史を歩んできたわけであるが、この類のつねとして、発音や曲節上の伝承が細々とあつて、成立当時までは遡らぬとしても、中世末頃の言語の様相を伝えることが多い。

本稿で取上げた『豊川本平家物語』は、早稲田大学演劇博物館に蔵される全一二巻二四冊本で、一八世紀後半に成立したと思われる、江戸系平曲の譜本であるといわれる。各冊とも題簽や内題には「平家物語」とあるだけであるが、巻一二下にみられる、明治四四年六月の館山漸之進の識語によると、「江戸第五世の宗匠」

## 上 野 和 昭

豊川検校の手になるものというので、〈豊川本〉とも呼ばれている。

この本の本文には、各行の右左にそれぞれ朱と墨との譜がつけられており、右側の朱譜は豊川検校の譜、左側の墨譜は線条式平家正節であるといわれている。ただし巻一二下だけは、一部分を除いて右側に墨や朱で譜が付けられており、他の二三冊とは性格を異にするものようである。

筆者は、今回この〈豊川本〉を国語音韻史的に調査してみたが、その結果、四つ仮名やオ段長音の開合の区別といった面からは近世的な様子がうかがえ、清濁・連声・音便の面からは中世末的な趣が看取されるように思われた。そこで本稿では、このうちの音便を中心に、先学の御研究の成果と比較しながら報告しようと思ふ。

音便についての考察は、次の三つの観点から行つた。

- ① サ行四段活用動詞がイ音便形をどの程度とるか
- ② バ・マ行四段活用動詞がウ音便形と撥音便形とのいずれを

とるか

③ ハ行四段活用動詞がウ音便形と促音便形とのいずれをとるか

なお、ここで扱う音便とは、「て・たり」に接続する場合のみである。また、音便形であることや非音便形であることがはっきりと表記されている例のみを扱っているので、たとえば「望て」などとあっても、本稿の考察からは除外してある。

まず①の問題点について述べる。〈豊川本〉におけるサ行四段活用動詞イ音便の実態は、次のとおりである。

A 非音便形ばかりの語

- 表ス(1)・致ス(4)・動かス(1)・俯ス(8)・オハス(6)・オハシマス(1)・オボス(3)・オボシメス(2)・キコシメス(2)・指ス(9)・シロシメス(1)・済マス(8)・澄マス(1)・遣ス(9)・尽ス(2)・費ヤス(1)・成ス(20)・翻ス(1)・伏ス(2)・亡ス(4)・申ス(7)・マシマス(1)・マス(12)・巡ラス(4)・モテナス(2)・犯ス(1)

B 音便形をとる語

- 遊バス(8)・出ス(43-4)・起コス(5-4)・押ス(1)・落ス(6-1)・下ス(1)・カザス(1)交ハス(1)・返ス(5-2)・下ス(1)・差ス(20)・記ス(4)・試ス(1)・散ラス(1)・疲ラカス(1)・点ス(2)・流ス

- (26)・直ス(1)・鳴ラス(2)・上ス(1)・外ス(13)・群メカス(1)・許ス(2)・沸カス(1)・渡ス(18-1)

Aは二六語、Bは二五語ある。後者のうち\*印を付した五語は、非音便形の例もみられるものである。各語の下の( )内の数字は用例数であり(以下同様)、\*印の五語には、さらに加えて下段に非音便形の用例数をも記した。「起コス」の場合を除けば、他の四語では圧倒的に音便形の例の方が多きが知られる。

また実際の本文では、本行中の仮名で音便を表わしたものと、主として片仮名で発音注的に表わしたものと二種類がある。

・やがて御書あそはひてぞ(六上448-9口説)

・大膳の太夫信成を呼出<sup>イ</sup>て(二上499口説)

さて、サ行四段活用動詞イ音便は、国語史的にみて、少なくとも中世以降衰退の一端をたどったものであるから、他の資料と比較した場合、同一の語がBに属しているものの方が古い資料で、Aに属しているものの方が新しい資料だということが一応言い得る。そこで橋本四郎氏が「サ行四段活用動詞のイ音便形に関する一考察」という論文で発表された狂言での様子と比較してみる。

〈豊川本〉と狂言とに共通してあらわれる語のみを取上げて、それぞれ資料で各語がA・Bいずれに属するかを一覧表にしたのが「表I」である。

これによると、「増ス・押ス・召ス・申ス・遣ス・表ス」の六語は、〈豊川本〉・狂言ともにAに属する語群である。「尽ス・成ス・致ス・スマス」の四語は、狂言・虎明本や虎寛本<sup>一</sup>でB、〈豊川



一二語で一致し、四語で《豊川本》の方がより新しい様子のみせ、二〜三語でより古い様子をみせているのであるから、ほぼ狂言の反映したサ行イ音便の状況とは一致すると言える。したがって、各本別の時と同様、中世末から近世初頃の状況であると言えようと思われる。

二

次に観点の②、バ・マ行四段活用動詞がウ音便形と撥音便形とのいづれをとるか、という点について考察する。この点について《豊川本》の実態は次のとおりである。

A ウ音便のみをとる語

- 射込ム (1)・浮カブ (2)・忍ブ (4)・賜フ (3)・呼ブ (3) 読ム (1)・惜シム (1)

B ウ音便形撥音便形両形をとる語

- 囲ム (3-1)・頼ム (1-2)

( ) 内の数字は、右が撥音便、左がウ音便の用例数  
C 撥音便形のみをとる語

- 遊ブ (1)・哀ム (1)・怪シム (3)・埋ム (1)・産ム (4)・選ブ (2)・及ブ (11)・悲シム (2)・組ム (9)・コロブ (1)・叫ブ (6)・沈ム (5)・進ム (12)・住ム (1)・畳ム (1)・行ム (1)・擲ム (3)・慎シム (5)・包ム (2)・積ム (1)・飛ブ (13)・並ブ (2)・臨ム (3)・挟ム (2)・平ム (2)・含ム (2)・結ブ (4)・咽ブ (4)・揉ム (1)・止ム (1)・喜ブ (6)・笑ム (1)・腋挟ム

(1)

\* 印の語は非音便形の例もみられる語である。それぞれの非音便形の数は、「浮カブ」(1)・「忍ブ」(1)・「読ム」(1)・「咽ブ」(1)である。なお、非音便形のみという語は「まどろむ」と「まろぶ」で、各一例みられた。ウ音便形のみをとる語は七語、両形ともにとる語が二語、撥音便形のみをとる語は三三語である。撥音便形をとる語が圧倒的に多い。

ところで、バ・マ行四段活用動詞は、ウ音便から撥音便へと変化しつつあったと考えられるので、他の資料と比較してみる。中世末から近世初頃のキリシタン物や抄物については、大塚光信氏や辰野弘由氏らに論考があって、語幹末母音によって整理分類した結果が報告されている。これにならって、《豊川本》の状況を整理してみると次のようになる。

① 語幹末ア列音

(ウ音便) 浮カブ・賜フ

(撥音便) 選ブ・畳ム・擲ム・並ブ・挟ム・平ム・止ム・腋挟ム

② 語幹末イ列音

(ウ音便) 惜シム

(撥音便) 怪シム・悲シム・慎シム

③ 語幹末ウ列音

(ウ音便) 《ナシ》

(撥音便) 埋ム・産ム・組ム・沈ム・進ム・住ム・行ム・包ム・積ム・含ム・結フ

④ 語幹末エ列音

(ウ音便) ヘナシ

(撥音便) 哀ム・叫ブ・咽ブ・笑ム

⑤ 語幹末オ列音

(ウ音便) 射込ム・忍ブ・呼ブ・読ム

(撥音便) 遊ブ・及ブ・コロブ・飛ブ・臨ム・採ム・喜ブ

(両形) 囲ム・頼ム

これによると、キリシタン物や抄物に比べて、語幹末がイウエオ列音の場合ではほぼ一致しているのであるが、語幹末ア列音の場合では違っている。すなわち、キリシタン物や抄物では主としてウ音便形であるのに、《豊川本》では撥音便形の方が多く、この点で《豊川本》の方が、キリシタン物や抄物よりもやや進んだ様子をみせる。

さて、このバ・マ行四段活用動詞のウ・撥音便形が、どのように本文中にあらわれるかについて記す。一でも述べたように、本行中の仮名で音便を表わしたものと、主として片仮名で発音注記的に表わしたものとがある。

・みやこきたやま雲林院にしのをでおはしけるか(二下313中音)

・宮は老僧共にはいとまとふでとよめさせおはします(四下29 12脚白声)

・夕部におよんで蔵人左少弁兼光に仰て(一下1259口説)

・大音をあげて竜王やある竜王やあるとぞ喚ッたりける(五

下2710甲声)

・只なみだにのみむせひでなごろふべしとは覚へねども(二下135初重)

また後者に準ずるが、振り仮名で示したのものもある。

・西光法師が父子が命をめし取給へとておめき喚で(二上146 白声)

三

③ 八行四段活用動詞がウ音便形をとるか促音便形をとるかの問題を検討する。次はその点についての《豊川本》の実態をまとめたものである。

A ウ音便形のみをとる語

祝フ(1)・言フ(1)・疑フ(1)・歌フ(3)・占フ(1)・

行フ(1)・負フ(4)・追フ(1)・シグラフ(2)・シツ

ラフ(2)・ツナフ(1)・副\*フ(1)・違フ(4)・ツクラ

フ(1)・問フ(1)・狙フ(1)・振舞フ(1)・舞フ(4)

A' ウ音便形が優勢な語

アフ(1-10)・忠フ(5-7)

( ) 内の数字は、右がウ音便、左が促音便の用例数、

B, C も同様

B ウ音便形と促音便形が同じくらいな語

語ラフ(1-1)・笑フ(3-2)

C' 促音便形が優勢な語

従フ(7-3)・向フ(44-4)

C 促音便形のみをとる語

- 失フ (3)・覆フ (1)・做フ (2)・ハカラフ (1)・披フ (6)・振フ (1)・纏フ (1)

\* 印を付した語は、非音便形をもとる語であるが、その用例数を示せば、次のとおりである。

- 言フ (1)・副フ (4)・アフ (10)・思フ (5)・向フ (1)・失フ (2)・做フ (1)・ハカラフ (1)・披フ (3)

また、非音便形のみをとる語は、

- 争フ (4)・候フ (12)・漂フ (2)・給フ (26)・集フ (8)・宣フ (8)・煩フ (1)・酔フ (3)

〈豊川本〉では、Aに属する語一八、Aに属する語二、Bに属する語二、Cに属する語二、Cに属する語七、という結果がでた。

ところで、全体的傾向としては、ウ音便形から促音便形へという流れがあったものと思われるから、前二項と同様に中世末から近世初頃の、他の資料と比較しながら考察する。ちょうど外山映次氏の「ハ行四段活用動詞音便形について―洞門抄物の場合―」という論文<sup>(4)</sup>で、東国語脈の抄物五種を取上げて検討しておられるので、ここではその成果を利用していただく。

外山氏は、抄物(甲)として巨海代鈔・大淵代鈔・扶桑説吟、抄物(乙)として天南代鈔・高国代鈔をあげておられ、いずれも中世末から近世初頃の資料である。(甲)(乙)の別は、促音便をとる語数をウ音便・促音便いずれか、または両方をとる語数で割

った数字——促音化率——によって分けられたもので、(甲)は二〇%内外、(乙)は五〇%以上となっている。そこで〈豊川本〉の促音化率を計算してみると三〇%くらいになり、(甲)と(乙)との中間的な数字を得た。また〈豊川本〉と抄物(甲)(乙)とで共通した語をひろって、A'ABC五分類による比較をしてみると〔表II〕のようになる。

〔表II〕 〈豊川本〉と洞門抄物との比較

語	抄物(甲)	抄物(乙)	豊川本
歌フ	A	A	A
行フ	A	A	A
舞フ	A	A	A
アフ	A	A	A'
追フ	A	A'	A
問フ	A'	A	A
思フ	A'	A'	A'
言フ	A'	C'	A
笑フ	A'	C'	B
向フ	B	C'	C'
失フ	B	C	C

做 フ	振 フ	従 フ	披 フ	副 フ
B	C'	C'	C'	C'
C	C'	C	C	C
C	C	C'	C	A

全体的な流れは、ウ音便から促音便へというものであるから、A、B、Cの順に新しくなっていると一応みることが出来る。そこで「表Ⅱ」を検討してみると、抄物(甲)↓抄物(乙)／へ豊川本」という流れの語四、抄物(甲)／へ豊川本)↓抄物(乙)という流れの語二、抄物(甲)／(乙)↓へ豊川本)という流れの語二、へ豊川本)↓抄物(甲)↓抄物(乙)という流れの語二、抄物(甲)↓へ豊川本)↓抄物(乙)という流れの語一、へ豊川本)↓抄物(甲)↓抄物(乙)という流れの語二、三者同じ語は三語であった。したがって、だいたいへ豊川本)は、抄物(甲)と(乙)との中間的な位置を占めるようである、これは促音化率の比較によって得た結果と一致する。このことから、へ豊川本)のへ行四段活用動詞ウ・促音便の状態は、やはり中世末から近世初頃のそれであろうと思われる。

さて、へ行四段活用動詞ウ・促音便形が本文中にどのような位置にあらわれるかについて、概観する。ウ音便・促音便いずれも前二者とほぼ同様であった、まず本行中の仮名で表わしたものを

- ・ 爰に大長刀持たる男子一人よりよをたり (四上 67 12<sup>拾</sup>)
- ・ たかきもいやしきも肝魂をうしなつて (一上 64 3 口説)

次に主として片仮名で発音注記的に表わしたものを

- ・ 其儀ならばゆき向ひてうばいとよめたてまつれや (二上 23 11 初重)

・ 其後浄明坊はいたであまたおふてはふ／＼かえるところに (四下 40 8 口説)

また、振り仮名で示したものを

・ 入道は只大方を執り行で杜候へ (三下 42 12<sup>白</sup>)

・ 法性随妄の雲あつく覆て (五下 7 9 下音)

などがあげられる。なかに、

・ 忠成色をうしなつて (五下 87 12 口説)

のような例が多くみられるが、

櫃原の地を切はらつて宮室を作りたまへり (五上 10 9 ~ 10 中音) のような例からして、促音便として扱ってよいものと思われる。

#### 四

以上、音便について三つの観点から、中世末から近世初頃の資料と比較してみた。もちろん方言や資料の質などの点で問題を残すが、一応②の場合にやや新しい様子をみせることが指摘されるものの、総じて中世末から近世初頃の状況を反映しているようである、へ豊川本)成立期——一八世紀後半——の状況を反映しているのではなさそうである。

音便についての状況の一部は以上のようにであるが、以下へ豊川本)の発音注記や譜の様子、また国語音韻史上の問題点について

て、例をあげて説明する。

まず発音注記についてであるが、「割ル」注記は全くみられない。これはもはや拗長音として発音しており、伝承から落ちていつてしまったためと考えられる。

「ノム」「ツメル」の注記は、両方とも区別なく、次のように入声韻尾や促音便の発音注記として使われる。

- ・そくノムのくわん (一上 23 3 下り)
- ・正月ツメ (一上 69 10 口説)
- ・ふしツメ議なりし (一上 34 14 初重)
- ・立ツメツメル香朱 (一上 9 14 折声)

ただ、促音便を表記する場合に用いられることはきわめて稀で、促音便表記の多くは、本行中に仮名の「つ」で示されるものである。

清音を指示するには、「スム」と注記する場合と「。」とで示す場合と二通りあるが、前者はきわめて少く、後者が圧倒的に多い。

- ・猪スムのくまにて (一上 54 10 詢)
  - ・豊スムのあかり (一上 4 9 口説)
  - ・号スムして (一上 13 6 白声)
  - ・国スム母 (一上 70 5 白声)
- また半濁音符と思われる「。」もある。
- ・御スム返事 (一上 51 10 白声)

濁点はほとんどが「ミ」(右肩)で、本文の仮名はもちろんのこと、振り仮名や漢字に付ける場合も多くある。

- ・勅ツメ賞ツメには (一上 3 7 口説)
- ・この刀ツメをぬきいだひて (一上 5 12 口説)
- ・侍ツメイとも (一上 56 7 拾声)

このほか、小書きの片仮名(稀に平仮名)で、発音などを注記したものも多い。

- ・よツメしなしとや (一上 7 13 初重)
- ・鞆ツメに取ツメッて (一上 12 2 口説)
- ・削ツメッて (一上 13 14 白声)
- ・十二ツメ月ツメ香朱 (一上 21 2 口説)

次に譜であるが、先述のように、(豊川本)の本文には、巻一二下を除いて各行の左右に、それぞれ墨と朱との譜が付けられている。次の例は巻一上の額打論の口説にみられるものであるが、尾崎本平家正節の譜と比較してみると、本文左側の墨譜が、平家正節を反映しているらしいことがわかる。

- ・御スム事スムと聞スムへさせ給スムふ (豊川本一上 56 4 口説)
- ・御スム衰スムと聞スムへさせ給スムふ (尾崎本三上 160 B 3 口説)

次に、清濁・連声・四つ仮名・オ段長音の開合といった、国語音韻史上の問題点について、(豊川本)での様子を概略する。

まず清濁であるが、次のような例がある。



・麗<sup>る</sup>けにては (二下 28 2 口説)

・謀<sup>ま</sup>叛<sup>は</sup>のくはたてしこと (三下 47 12 白声)

・防<sup>と</sup>所の (四下 104 2 拾声)

「麗<sup>る</sup>け」は、第二拍は濁音であるとしても、第四拍は日葡辞書その他中世古辞書類などから清音と考えられる。濁音化したのは近世後期であるらしい。「くはたつ」も、中世末の頃は日葡辞書などから第三拍清音、江戸時代のうちに変化したものと考えられる。また、「ふせく」については、〈豊川本〉ではほとんどの場合に清音形を示すが、わずかながら濁音形もまじる。中世古辞書類では濁音形もみられ、キリシタン物では濁音形でてくるので、中世末頃には濁音形の方が主だったかと思われる。すると〈豊川本〉の大勢をしめる清音形は、中世末よりも古いかたちを反映していることになる。このように清濁という点からは、〈豊川本〉は遅くとも中世末頃の様子を反映しているといえる。

連声については、きわめて多くの例がみられる。

A 漢語 II 漢語 感のう (三下 65 2 初中 〈感応〉)

安穩 (二上 86 5 口説) ……

B 和語 II 和語

B<sub>1</sub> 〈オン(御) + ……〉 御なわれみ (二下 33 1 折声) ……

B<sub>2</sub> 〈ン(推量の助動詞) + は / を(助詞)〉

むねをさゝんな (五上 76 7 白声)

はねられたらんの (二上 144 1 白声) ……

C 和語 II 漢語 御臆念 (三上 8 13 14 口説)

D 漢語 II 和語

D<sub>1</sub> 〈↑ + t + は / を(助詞)〉

五節た (五下 80 1 拾口説) 破滅ト (四上 101 4 口説)

D<sub>2</sub> 〈↑ + n + は / を(助詞)〉

いちにんな (一上 37 9 中音)  
昇殿の (一上 4 5 口説) ……

D<sub>3</sub> 〈↑ + n + …… (助詞以外)〉

連銭芦毛 (四下 50 1 口説)

院内 (二上 77 4 5 白声)

〈豊川本〉の連声は、すべての場合とはいわぬまでも、このよ  
うな公式で表わされるくらいに多くみられる。連声がこれほど著  
しく表記されているということは、近世の様子というよりはむしろ  
中世的であると言えるように思う。

次に四つ仮名についてであるが、和語を対象に巻六まで行った  
調査では、

① チをジとしたもの三語六例

② ツをズとしたもの四四語一三二例

③ ズをツとしたもの四語七例

という結果が得られた。例を示せば次のようである。

① チージ

・あさじがはら (五上 34 6 7 下音)

・はじとこそ (三下 10 10 折声)

② ツーズ

・いたずらもの (二上 116 6 白声)

・埋ウツまれける (五上 19 4 口説)

③ ズーツ

・きづにて (四下 45 13 白声) のこさづ (一上 66 1 拾声)

この結果を近世初頃の「醒睡笑」「きのふはけふの物語」「杉楊枝」「狂言記」などと比較すると、ツーズの例が非常に多くなっており、これらの資料より「豊川本」の方が、表記上の混同が進んだ様子を見せている。したがって、四つ仮名については、近世的な様子を見せているのではないかと思われる。

また、オ段長音の開合の問題についても、和語を対象に巻六まで調査してみたところ、表記の混同例が非常に多く数えられた。そしてその大部分が開音で表記すべきところを合音に表記してしまった例ばかりで、この逆の例はわずかに三語一〇例にすぎない。

・散々につかみをふて (五上 93 8 白声)

・すこしもうたごふかたもましまさず (二下 110 8 白声)

・馬にはよをふ (四下 48 4 拾声)

・ながしまいらしやうとこそ (二上 119 9 10 胸白声)

・心はたきやうすゝめ共 (四上 68 2 拾声)

・もやうしける (三下 30 5 中音)

しかし全体としてみると、「豊川本」では開合表記の混同例が和語だけでも数多く存在しているわけで、「三河物語」や「きのふはけふの物語」などよりもずっと頻繁である。このことからす

ると、オ段長音の開合表記という点からは、「豊川本」の混同の様子は近世的であると言えるように思われる。

五

以上音便を中心にして「豊川本」の音韻について報告したが、音便のほか清濁や連声の点では中世末から近世初頃の様子を反映しているようであり、四つ仮名やオ段長音の開合という点では、近世的な様子を見せているということが言えた。この意味するところを考えると次のことが言えそうである。すなわち、後者——四つ仮名・オ段長音の開合——は、音韻そのものの全体的変化であって、前者とはこの点で異なる。したがって、平曲伝承の上では、音韻の全体的変化に関わるものはこれを伝えず、そうでないものはこれを伝承にとどめていたのである。

平曲伝承の上で、国語音韻史上の問題がいかにか取扱われ、反映されているかを調べてみることは意義深いことである。なぜなら、平曲を伝承していく過程で、その当事者がその時代および地域の音韻の状態に照らして、伝承し得べきものとし得ぬものとを、意識的にあるいは無意識的に別けていったわけで、ここにその人物の音韻に対する意識のしかたが如実に反映するからである。「豊川本」は、伝承者が近世の人であったために先述のような結果を得たが、四つ仮名やオ段長音の開合については、もっときめ細かに近世資料と比較検討すれば、より一層成立期を狭めていけるであろう。さらにまた「豊川本」の特徴として、各行の左右にそれぞれ墨と朱の譜があることを述べたが、そこに反映した

アクセントの研究も今後の問題として残されている。墨譜は線条式平家正節であるとしても、朱譜が江戸系平曲のアクセントを反映するとすれば、資料の乏しい江戸アクセントに言及しうる資料となる。また、それらから「豊川本」の成立を考えることが可能であると思われる。

(注1) 増補 国語国文学研究史大成9 『国語学』(昭和五二—四

三省堂) 248頁

奥村三雄 『平曲譜本の研究』(昭和五六—五 桜楓社) 84

べ) 館山漸之進 『平家音楽史』(明治四三—一〇) 333頁

(2) 『国語国文』三一—四、昭和三七—四

(3) 大塚光信 『六四、マ四の音便形』(『国語国文』二四—三

昭和三〇—三三)

辰野弘由起 『玉塵抄』におけるバマ四段の音便形について(『二松学舎大学人文論叢』一四 昭和五三—一〇)

(4) 『近代語研究』二、昭和四三—一

(5) 金田一春彦 『平曲の音声』下(『音声学会々報』一〇—

昭和三四—一一)

(6) 平家正節刊行会 『平家正節』(昭和四九—七 大学堂書

店)

## 新刊紹介

山下一海著

『蕪村の世界』

本書は、第一編 浪花を出でて—絵と俳諧の生涯、第二編 恋君の扇まき—濃密

な心の発句、第三編 薄や萩に風立ちぬ—戯れの自由の連句、第四編 行き行きて故郷の春—郷愁ゆらめく俳詩、第五編 俗を離れて詩の中に—蕪風薫う俳文・俳論、の五編から成る。著者が、まえがきにおいて「私は、作品について最も雄弁なのは作品そのものであると思っています」と述べてお

られるように、具体的な作品の鑑賞を中心に構成されており、中でも、第二編の発句が特に読みごたえがある。一般向の書であるが、俳人蕪村の全体像が、平易で簡潔な鑑賞文の中に浮かび上がってくる好著であるといえよう。(昭57・11 有斐閣 B6 判二六〇頁 一九〇〇円)〔倉員正江〕

(7) 菅井時枝 『醒睡笑における版本の四つ仮名混乱について』(『中央大学国文』一四 昭和四六—二)

北原保雄 『きのふはけふの物語研究及び総索引』(昭和四八—二 笠間書院)

三宅伯一郎 『金地院旧蔵本『きのふはけふの物語』の音韻について』(『金沢大学国語学文学研究』九 昭和五四—一)

倉島節尚 『四仮名の混乱は「ヂ・ジ」が先行した—咄本『杉楊枝』の例を手懸かりに—』(『国語と国文学』五四—

六 昭和五二—六)

武井睦雄 『寛文二年板「狂言記」における四つ仮名および

開合の表記について』(『国語研究室』二 昭和三八—一〇)

(8) 中田祝夫編 『原本三河物語』(昭和四五—九 勉誠社)

(注7) の北原氏著書および三宅氏論文

(附記) 本稿は国語学会昭和五七年春季大会で発表した原稿に手を加えたものである。その折の表と違ふところがあるが、再検討した結果、本稿のようにした方がよいと思われるので訂正する。本稿を成すにあたり辻村敏樹先生、秋永一枝先生、岩淵匡先生から御指導いただいた。また発表の際にも諸先生方いろいろなとお教えいただいた。ここに厚く御礼申し上げます。